

国際日本学研究所

I 2014年度大学評価委員会の評価結果への対応

大学評価委員会からは、設立以来10年以上経過しているので、プロジェクトベースではなく「国際日本学の構築」という設置目的に即して、研究所が総体としてどのように取り組むべきかを考えるときではないかという提言があった。本研究所は研究費の大半を外部資金に頼らざるを得ないのが実状であり、現在も新たに私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「〈脱・中心〉の比較研究—国際日本学の方法による—」に応募中である。これまでの外部資金による数々のプロジェクト自体が、まさに「国際日本学の構築」という設置目的そのものと密接に関わるものであり、その時々プロジェクトの斬新性に加えて、通奏低音の如き継続性が一方で高く評価され、それ故、着実に順次、外部資金を得られていると考えている。現在も評価委員会の指摘を常に意識しながらプロジェクト計画を立て実施に移すことにしている。なお研究所メンバーの業績一覧の掲載拡充などを含むHPの改善は徐々に進行しており、また社会評価としての書評情報の収集は、指摘を踏まえて実施に取り組んでいる。

II 現状分析

1 理念・目的
1.1 理念・目的は、適切に設定されているか。
①研究所（研究センター）として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的が設定されていますか。 設定されている。
1.2 理念・目的が、大学構成員（教職員および学生）に周知され、社会に公表されているか。
①理念・目的はホームページ等で、社会一般に対して周知・公表されていますか。 公表されている。
1.3 理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。
①理念・目的の適切性を定期的に検証していますか。また、その検証プロセスを説明してください。 行っている。検証プロセスとしては毎年、年度初めと年度末に運営委員会にて議論している。また年度途中でも、大きな企画を計画するときは、研究所の目的の適切性から改めて検討がなされている。
2 研究活動
2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。
2014年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。
①研究・教育活動の実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等） シンポジウム・公開研究会等開催案内・報告等 http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/62/Default.aspx
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等） 刊行物 http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1165/Default.aspx
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文引用等） 山田仁史「Kurturschichten in Alt-Japan, herausgegeben von J. Kreiner」:『文化人類学』79(2): 神崎宣武「クライナー編『日本とはなにか』(今こそ読みたい「この2冊」): サライ 592 2014年12月号 王敏著『漢魂と和魂』: 光明日報 2014年7月20日 北京週報 2014年7月22日 中華人民共和国新瀋陽総領事館 HP 『世界知識』(2014年24期)
④研究所（研究センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等） 大規模プロジェクトである COE 終了後は実施していない。
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況 2014年度獲得・実施分のみ列記する 小口雅史 基盤(B) 学界未利用の在東欧・北欧所蔵西域出土文書を用いた、東アジア新古文書学の創造的研究 小口雅史 基盤(B) 律令国家の北限支配からみた、津軽海峡を挟む古代北方世界の実態的研究 菱田雅晴 基盤(A) 中国共産党に関する政治社会学的実証研究—中南海研究(II) ヨーゼフ・クライナー 基盤(B) 在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信 濱中春 基盤(C) 1800年前後のドイツ語圏における気象学の言説と表象 中島成久 基盤(C) インドネシアのアブラヤシ農園労働者をめぐるヘゲモニー関係の研究

米家志乃布 基盤(C)19世紀におけるフロンティアの地域像に関する日露比較研究
 星野勉 基盤(C)異文化理解へ向けての「間の解釈学」の構築
 今泉裕美子 基盤(C)ミクロネシア信託統治の始原期に関する研究—委任統治からの移行と植民地社会の再編
 小林ふみ子 若手(B)狂歌書目総覧の作成
 大塚紀弘 若手(B)日本中世前期における版本文化の基礎的研究

3 管理運営

3.1 明文化された規程に基づいて管理運営を行っているか。

①所長（センター長）をはじめとする所要の職を置き、また運営委員会等の組織を設け、これらの権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。

所長および研究上の各アプローチリーダーを置き、そのもとで運営委員会が設置され、規程に基づき定期的に会議が開催されている。

4 内部質保証

4.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証に関する各種委員会は適切に活動していますか。

学際的・国際的と言う研究様態そのもの、そしてそれに依拠し形成されている研究組織そのものが、質保証のシステムであるといえる。具体的には、研究組織内では、アプローチ代表が、研究会等の報告を運営委員会で行い、別のアプローチ代表や兼担所員より、指摘やアドバイス等を受けるという形式がとられている。また年度末には、文科省採択研究事業の総括の会を実施している。

②質保証活動への教員の参加状況を説明してください。

毎月の運営委員会、年度末の総括の会の形で、各教員が積極的に参加して機能するように工夫している。

教育研究等環境【任意項目】

教育研究等を支援する環境や条件は適切に整備されているか。

・ティーチング・アシスタント（TA）、リサーチ・アシスタント（RA）、技術スタッフなどの教育研究支援体制は整備されていますか。

とくに情報処理部門について、RAを置いて研究支援態勢を整えている。

・その他部局で取り組んでいる重点事項があれば記載してください。

研究過程で集めた貴重書類について、長期保管のための環境整備と、電子化による保全・公表に取り組んでいる

研究倫理を遵守するために必要な措置をとっているか。

・研究倫理に関する学内規程に基づき、規程の周知、研修会の開催等、研究倫理を浸透させるための取り組みを行っていますか。

規程については、年度初めの周知のため、会議資料に含めて配布している。

社会連携・社会貢献【任意項目】

教育研究の成果を適切に社会に還元しているか。

・教育研究の成果を基にした社会へのサービス活動（シンポジウムや公開講座、資料の公開など）を行っていますか。

研究会は原則として公開とし、様々な媒体を通じて広報に努め、一般市民の参加を促している。

・学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組みを行っていますか。

参加者の中に多数の他大学研究者などが含まれており、それらの人脈を通じて学外組織との連携を図り研究の向上に努めている。

・地域交流や国際交流事業に関する取り組みを行っていますか。

在欧日本仏教美術関係でデータベースを活用して国際シンポジウム等を複数回開催している。

現状分析根拠資料一覧

資料番号	資料名
1 理念・目的	
1-1	HP 所長挨拶「所長就任にあたって」 http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1283/Default.aspx
1-2	ニューズレターNo.20「所長ご挨拶」
1-3	運営委員会議事録
2 研究活動	
2-1	シンポジウム・公開研究会等開催案内・報告等 http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/62/Default.aspx 刊行物 http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/1165/Default.aspx

2-2	http://epaper.gmw.cn/gmrb/html/2014-07/20/nw.D110000gmrb_20140720_2-06.htm
2-3	http://japanese.beijingreview.com.cn/zxnew/txt/2014-07/24/content_631012.htm http://niigata.china-consulate.org/jpn/
3 管理運営	
3	研究所規程 http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/271/Default.aspx
4 内部質保証	
	各回の運営委員会議事録
教育研究等環境	
	公開資料一覧 HP : http://hijas.hosei.ac.jp/tabid/277/Default.aspx
社会連携・社会貢献	
	Event Report HP : http://hijas.hosei.ac.jp/Default.aspx?tabid=107

Ⅲ. 研究所の重点目標

HP の内容を洗練されたものに組み直し、情報発信をより分かりやすい形で推進する。そのために研究所研究助成金を活用して、大幅な改訂を目指す。またそれを通じて主催研究会を積極的に公開し、研究成果の幅広い社会還元を目指す。

Ⅳ 2014 年度目標達成状況

No	評価基準	教員・教員組織					
1	中期目標	国際日本学の方法の実践のために、国内外の適切な研究者を兼担ないし客員所員として迎え、その充実を目指す。					
	年度目標	Eajs の場などを利用して、研究所の海外における知名度アップを図り、新しい研究者の協力を要請する。					
	達成指標	実際の所員数の増大					
	年度末報告	<table border="1"> <tr> <td>自己評価</td> <td>B</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>研究所の主たる研究企画の最終年度にあたり、これまでの研究の集大成に全力を注いだため、新規分野の研究者の補充は取って行わなかった。一方で国際日本学インスティテュートへ研究所の兼担所員が関わるケースは前年度に続いて活発であった。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>来年度から新しい研究企画を立案して文科省に応募中である。それにふさわしい学内外の研究者をすでにリストアップしていて、新年度から迎え入れることが内定している。</td> </tr> </table>	自己評価	B	理由	研究所の主たる研究企画の最終年度にあたり、これまでの研究の集大成に全力を注いだため、新規分野の研究者の補充は取って行わなかった。一方で国際日本学インスティテュートへ研究所の兼担所員が関わるケースは前年度に続いて活発であった。	改善策
自己評価	B						
理由	研究所の主たる研究企画の最終年度にあたり、これまでの研究の集大成に全力を注いだため、新規分野の研究者の補充は取って行わなかった。一方で国際日本学インスティテュートへ研究所の兼担所員が関わるケースは前年度に続いて活発であった。						
改善策	来年度から新しい研究企画を立案して文科省に応募中である。それにふさわしい学内外の研究者をすでにリストアップしていて、新年度から迎え入れることが内定している。						
No	評価基準	教育研究等環境					
2	中期目標	研究所本体を中心に、資料室・研究室・サーバー室の連携を強化し（配置やスペース確保を含む）、COE 以来、膨大に収集された貴重な史資料の有効活用を目指す					
	年度目標	資料の保管・活用状況を改善するために、まずはスペースの再整理と、所在目録の整備、さらにその円滑な活用法を確立する。					
	達成指標	研究における史資料利用の増大					
	年度末報告	<table border="1"> <tr> <td>自己評価</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td>理由</td> <td>研究所事務室併設の書架、所長室内の書架、研究室4内の書架を再構成して、ジャンル毎にまとまった使いやすい配置にすることができ、結果として資料利用が従来より活発化した。</td> </tr> <tr> <td>改善策</td> <td>セミナー室の移転が計画されているので、新しいセミナー室内へ、過去の刊行物を一定程度常設することなども今後考えていく。しかしこれは法人の問題でもあり、自助努力には自ずと限界がある。</td> </tr> </table>	自己評価	A	理由	研究所事務室併設の書架、所長室内の書架、研究室4内の書架を再構成して、ジャンル毎にまとまった使いやすい配置にすることができ、結果として資料利用が従来より活発化した。	改善策
自己評価	A						
理由	研究所事務室併設の書架、所長室内の書架、研究室4内の書架を再構成して、ジャンル毎にまとまった使いやすい配置にすることができ、結果として資料利用が従来より活発化した。						
改善策	セミナー室の移転が計画されているので、新しいセミナー室内へ、過去の刊行物を一定程度常設することなども今後考えていく。しかしこれは法人の問題でもあり、自助努力には自ずと限界がある。						
No	評価基準	社会連携・社会貢献					
3	中期目標	社会連携・社会貢献を進めるために、電子化などを通じて研究成果を広く簡便に公開できるようにするとともに、本務に影響の出ない範囲で、刊行物・所蔵史資料の閲覧を可能にする。					
	年度目標	HP の内容を洗練されたものに組み直し、情報発信を分かりやすい形で推進する。					
	達成指標	HP の改築					
	年度末	自己評価	B				

	報告	理由	研究所が独自に開設している HP がシステム上いささか古くなっていて使いにくくなっている。そのため HP の更新は日常的に行われているものの、必ずしも十分な量の電子データをまだ提供できてはいない。
		改善策	HP システムについては近々の更新を計画していて業者と検討中である。研究所のこれまでの刊行物については、図書館のリポジトリ事業と連携しながら充実させていくこととし、HP では刊行物以外の貴重な所蔵資料の電子化を図っていきたい。

V 2015 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教員・教員組織
1	中期目標	国際日本学の方法の実践のために、国内外の適切な研究者を兼担ないし客員所員として迎え、その充実を目指す。
	年度目標	EAJS の場や JBAE の活用、あるいはクライナー賞の広報の場などを利用して、研究所の海外における知名度アップを図り、新しい研究者の協力を要請する。
	達成指標	実際の所員数の増大
No	評価基準	教育研究等環境
2	中期目標	研究所本体を中心に、資料室・研究室・サーバー室の連携を強化し（配置やスペース確保を含む）、COE 以来、膨大に収集された貴重な史資料の有効活用を目指す
	年度目標	資料の保管・活用状況を改善するために、まずはスペースの再整理と、所在目録の整備、さらに和書など貴重図書の保管環境を改善し、その円滑な活用法を確立する。
	達成指標	Web など電子媒体による提供資料の増大
No	評価基準	社会連携・社会貢献
3	中期目標	社会連携・社会貢献を進めるために、電子化などを通じて研究成果を広く簡便に公開できるようにするとともに、本務に影響の出ない範囲で、刊行物・所蔵史資料の閲覧を可能にする。
	年度目標	HP の内容を洗練されたものに組み直し、情報発信をより分かりやすい形で推進する。また主催研究会を HP その他を通じてより積極的に公開していく。
	達成指標	研究会への一般市民の参加者の増加

VI 2012 年度認証評価 努力課題に対する改善計画（報告）書

該当なし

VII 大学評価報告書

大学評価委員会の評価結果への対応に関する所見
<p>国際日本学研究所に対して、2014年度大学評価委員会からは、主に国際日本学研究所が総体として「国際日本学の構築」という研究所の設置目的を反映した取り組みを行うべきではないかという提言があったが、これに対しては、1) 同研究所が研究費の大半を外部資金に頼らざるを得ないのが実情であり、実際に私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に応募中であること、2) これまでの外部資金による数々のプロジェクト自体が「国際日本学の構築」という目的と密接に関わるものである、3) 各プロジェクトの継続性が高く評価されている、ということを理由に特段目立った対応はとられていないようである。同研究所の実情に鑑みれば、個々の理由には妥当性があるものの、同提言は研究所の社会的影響力や存在感を高めるためには必要な措置であり、今後同提言が研究所において中長期的な検討事項となることを引き続き期待する。</p>
現状分析に関する所見
1 理念・目的
<p>1.1 理念・目的は、適切に設定されているか。</p> <p>国際日本学研究所は、研究所として目指すべき方向性等を明らかにした理念・目的を設定している。具体的には、同研究所は、世界各地で学際的に開かれた「日本学」を結びつけ、「日本学」総体に新たなダイナミックな展開をもたらすことで、「国際日本学」という新たな学問分野を確立することを目的としている。</p>
<p>1.2 理念・目的が、大学構成員（教職員および学生）に周知され、社会に公表されているか。</p> <p>国際日本学研究所の理念・目的は、研究所ホームページにおいて所長の挨拶として周知・公表されている。しかしそれとは別に組織として理念・目的を公表している形が望ましい。</p>
<p>1.3 理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。</p>

<p>国際日本学研究所は例年、年度初めと年度末に運営委員会を開催し、理念・目的の適切性を検証している。また年度途中でも、大きな企画を計画する際は、研究所の目的の適切性を考慮に入れて検討を行っている。</p>
<p>2 研究活動</p>
<p>2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。</p> <p>国際日本学研究所は、2014年度も数多くの研究会、シンポジウム、セミナーを開催している。それらは同研究所のホームページ上で確認できる。</p> <p>現状分析シートには、同研究所のホームページのアドレスのみが記載されているが、実際にホームページを確認しても、どこまでが同研究所に関連した研究成果なのかが分かりにくい。他の研究所のように研究成果を具体的に記述してほしい。書評などについては、6点の出版物が確認できる。</p> <p>国際日本学研究所は、外部からの組織評価が入る研究プロジェクトなどを実施していない。</p> <p>科研費に関しては、2014年度に獲得・実施されたものとして11件確認することができ、多くの研究員が外部資金を獲得している。</p>
<p>3 管理運営</p>
<p>3.1 明文化された規程に基づいて管理運営を行っているか。</p> <p>国際日本学研究所では、所長の下に研究上の各アプローチリーダーが置かれるほか、運営委員会も規程に基づき定期的に開催されている。</p>
<p>4 内部質保証</p>
<p>4.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。</p> <p>国際日本学研究所では、運営委員会でアプローチリーダーが研究会等の報告を行い、それに対して別のアプローチリーダーや兼担所員が指摘を行うという形式がとられており、研究の質保証に関しては適切に対処していると判断できる。また年度末の総括のための全体会で、アプローチ相互の検証がなされている。</p> <p>質保証活動への教員の参加については、毎月の運営委員会や年度末の総括の会に各教員が参加している。年度初めから開催曜日・開催時刻を予め設定のうえ、かつ最低でも各アプローチの中核を担う研究者が参加できる日を調整して日程が設定されており、運営委員が複数学部にまたがっている実態に対する配慮がなされている。</p>
<p>教育研究等環境【任意項目】</p>
<p>教育研究等を支援する環境や条件は適切に整備されているか。</p> <p>国際日本学研究所では、情報処理部門にRAを置いて研究支援態勢を整えている。</p> <p>また、研究関連の貴重書類の長期保管に必要な環境整備（保存場所の工夫、防カビ防虫対策など）と電子化による保全・公表に取り組んでいる。</p>
<p>5.2 研究倫理を遵守するために必要な措置をとっているか。</p> <p>国際日本学研究所は、研究倫理に関する学内規程を、毎年1年度初めに配布しており、研究倫理を浸透させるための取り組みを行っている判断できる。</p>
<p>社会連携・社会貢献【任意項目】</p>
<p>教育研究の成果を適切に社会に還元しているか。</p> <p>国際日本学研究所では、研究会は原則として公開されており、様々な広報活動を通じて、一般市民の参加を促しており、教育研究の成果を基にした社会へのサービス活動を十分に行っていると判断できる。</p> <p>学外組織（たとえばスイスのチューリッヒ大学）との連携については、研究活動に参加する他大学研究者の人脈を通じて、学外組織との連携を図っている。また、在欧日本仏教美術関係データベースを活用して、国際シンポジウム等を複数回開催するなど、地域交流や国際交流事業に関する取り組みも行っている。</p> <p>その結果、たとえばデータベース化によって欧州各地の日本学研究者が資料の所在状況を知ることが可能になり、法政大学が拠点となって、日本を含めて欧州各地の研究者が情報を共有し交流を深め、それぞれの研究対象についてもっともふさわしい研究者を中心に研究会が組織され、正当な評価が法政大学に提供され、それがまたデータベースを書き換えるという好循環の成果が生まれてきている。</p>
<p>2014年度目標の達成状況に関する所見</p> <p>国際日本学研究所の2014年度の目標として、所員数の増大、研究における史資料利用の増大、ホームページの改築が掲げられていた。このうち史資料利用の増大は「A」評価であるものの、所員数の増大とホームページの改築は「B」評価となっている。この2点は2013年度にも達成目標として掲げられたものであり、達成の兆しがないところが気になるところであるが、今後の取り組みに期待したい。</p>
<p>2015年度中期・年度目標に関する所見</p>

国際日本学研究所の 2015 年度中期・年度目標は、達成指標も明確であり、具体的に設定されている点が評価できる。しかし、「教員・教員組織」の達成指標である所員数の増大や「社会連携・社会貢献」項目におけるホームページの再構築などについては、昨年、一昨年とも顕著な進展が見られなかった目標であり、現実性の観点からみるといささか難があると思われる。しかしながら、研究所の発展には必要な改革であるので、今後の取り組みに期待したい。

総評

国際日本学研究所では、現在科研費プロジェクトを中心に各種研究活動が活発に行われており、また研究会やシンポジウムなども比較的高い頻度で開催されるなど、研究所として社会的役割を十分に果たしていると評価できる。他方で、科研費プロジェクトの中には、それらのテーマを客観的に見る限り、研究所の目的である「国際日本学の構築」とは関係が希薄と思われるものがあり、これらのプロジェクトが研究所の理念・目的をどの程度反映しているのかが必ずしも明確ではない。2014 年度の報告書の総評で、「個々のプロジェクトベースでの総括としてではなく、国際日本学研究所という組織を母体として展開される研究活動について、いわば第三者的な視座から検討されること」と指摘されたように、研究所の理念・目的に沿った研究プロジェクトを意識的に立ち上げる必要があるのではないかと。今後、当大学で研究所の更なる発展に向けて、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業や科研費基盤研究(A)クラスで国際日本学に密接な関連性を持った研究プロジェクトが立ち上がることを期待したい。最後になるが、SGU 採択を受け、本学の構想名である「サステイナブル社会を構想する」ような研究プロジェクトを本研究所からも積極的に推進されることを期待する。